

雜報

●會員動靜

賜本俸五級俸

京都帝國大學教授

島 園 順 次 郎

(九月二十五日)

正七位

平 井 重 次 郎

正七位勳五等

神 山 房 助

正七位勳六等

甲 斐 義 長

敘從六位

陸軍一等軍醫正七位

平 井 重 次 郎

陸軍一等軍醫正七位勳五等

神 山 房 助

陸軍一等軍醫正七位勳六等

甲 斐 義 長

特旨ヲ以テ位一級被進

(九月五日)

敘正六位

從六位勳六等

藤 井 眞 澄

陸軍一等軍醫從六位勳六等

藤 井 眞 澄

特旨ヲ以テ位一級被進

(九月二十日)

岡山醫科大學附屬醫院專門部教授

大 森 大 亮

岡山醫科大學附屬醫院皮膚科泌尿器科醫員ヲ命ス

給年手當金千圓

(九月十八日)

岡山醫科大學教授 田 中 文 男

補岡山醫科大學附屬醫院長  
職務俸金五百圓下賜

岡山醫科大學教授 藤 田 秀 太 郎

岡山醫科大學附屬醫院長ヲ免ス

岡山醫科大學附屬醫學專門部教授 田 中 文 男

岡山醫科大學附屬醫院耳鼻喉科醫長ヲ命ス

給年手當金千貳百圓

(九月二十六日)

石 田 堅 三 郎

任岡山醫科大學助教授兼岡山醫科大學附屬醫學專門部教授

敘高等官六等

岡山醫科大學助教授 石 田 堅 三 郎

本俸八級俸下賜

職務俸四百圓下賜

岡山醫科大學附屬醫學專門部教授 石 田 堅 三 郎

岡山醫科大學附屬醫院外科醫員ヲ命ス

給年手當七百圓

(十月一日)

朝鮮總督府道慈惠醫院醫官 三 宅 助 一

陸敘高等官六等

臺灣總督府醫學專門學校教授 橫 川 定

陸敘高等官三等

陸軍高等官四等

賜年俸四千百圓

任帝都復興院技師  
敘高等官二等

賜三級俸

臺灣總督府醫院醫長 近藤喜一  
(十月一日)

岡山醫科大學教授 田中文男  
(九月十八日)

正六位勳四等 岸一太

帝都復興院技師 岸一太  
(十月六日)

陸軍一等軍醫 杉山龜之助

陸軍一等軍醫 平野林

陸軍一等軍醫 野上尙志

陸軍一等軍醫 長田祖村

陸軍二等軍醫 太田幸衛

陸軍二等軍醫 吉永義雄

陸軍二等軍醫 小竹豐

陸軍二等軍醫 田村權五郎  
(八月三十一日)

朝鮮總督府道慈惠醫院醫官 笹原竹三  
(八月三十一日)

五級俸下賜

朝鮮總督府道慈惠醫院醫官 笹原竹三  
(八月二十日)

咸鏡南道惠山鎮慈惠醫院長ヲ命ス

八級俸下賜

朝鮮總督府道慈惠醫院醫官 武田俊一郎  
(八月三十一日)

陸軍一等軍醫 岸本宗治郎

陸軍一等軍醫 八井田茂實

陸軍一等軍醫 寺坂幸太郎

陸軍一等軍醫 井上文夫

陸軍一等軍醫 西田瀨治  
(八月三十一日)

賜二等給

臺灣總督府醫學專門學校教授 廣畑龍造  
(八月二十日)

京都市へ出張ヲ命ス

馬公要港部々員兼分隊長海軍々醫大尉 高城喬

免本職並兼職佐世保鎮守府附被仰付

海軍軍醫大尉 藤田秀三郎

海軍軍醫大尉 栗栖幸穂

海軍軍醫學校高等科學生教程卒業ニ付學生被免

海軍軍醫大尉 藤田秀三郎

補舞鶴要港部部員

海軍軍醫大尉 栗栖幸穂

補天龍軍醫長兼分隊長

(十月十五日)

- 上坂熊勝君 は本月一日附にて藤田學長歐米各國へ出張不在中學長事務代理を命せられたり
- 安藤畫一君 は本月一日岡山醫科大學附屬醫院產婆看護婦養成科主事を囑託せられたり
- 關場代五郎君 大正十年文部省在外研究員として出發渡歐せられし同君は本月十八日無事歸朝せられたり
- 藤原角一君 は豫て倉敷紡績會社倉敷工場に勤務し居られしか今般香川縣坂出町同會社中央病院坂出分院に轉勤せられたり
- 難波三元夫君 は大正九年岡山醫學專門學校卒業以來徳島市古河病院に勤務し居られしか今般本縣都窪郡倉敷紡績會社中央病院倉敷工場分院に轉勤せられたり
- 柏村儔雄君 は今般福岡縣田川郡糸田村豐國鑛業所病院に勤務せられたり
- 山田甫一君 豫て東京慶應大學病院外科に勤務し居られし同君は今般長野縣上諏訪町日本赤十字社長野支部諏訪病院に轉勤せられたり
- 尾藤太君 は本月一日岡山醫科大學助手に任し解剖學教室勤務を命せられたり
- 松永威君 は豫て支那芝罘日本赤十字社救療所に勤務し

居られしか今般滿鐵公醫を命せられ南滿洲熊岳城に轉勤せられたり

○川本健次君 は今般和歌山縣海草郡黑江町海南病院に於て診療に従事せられたり

○朝長貞男君 は豫て東京市吾妻產婦人科病院に勤務し居られしか去月の大震災に際しても無事避難歸國し今般福岡縣遠賀郡蘆屋町町立蘆屋病院に勤務せられたり

○辻岡新作君 は豫て岡山醫科大學附屬醫院產婦人科教室に勤務し居られしか今般愛媛縣今治市今治病院產婦人科部長として就任せられたり

○鄭錫鎔君 は今般朝鮮大邱府京町一ノ八三に轉居せられたり

○三宅乾君 は豫て東京市阿久津病院に勤務し居られしか今回辭職歸郷せられたり

今田正人君逝く 君は明治三十四年岡山醫學專門學校卒業後鄉里廣島縣安藝郡熊野村に於て開業し後同縣加茂郡阿賀町に轉し依然醫業に従事し居られしか本月十一日病を以て遠逝せられたりと洵に痛惜に堪へざるなり

村井素直君 は明治四十四年岡山醫學專門學校を卒業し臺灣總督府醫學專門學校及び同地日本赤十字社醫院に勤務し大正九年同校及び同醫院を辭し同地石坊街山崎醫院に於て診療に従事し本年八月同院を辭し上京し東京市本所區龜澤町森醫院を經營し開業後一週間に於て去月一日の大震災に居室を焼出され學家例の被服廠に避難されしも遂に親子四人、看護婦五名と共に無慘の最後を遂げられたりと洵に言語に絶したる悲事、嗚呼哀哉

●故菅、筒井兩校長銅像除幕式 故菅、筒井兩岡山醫學專門學校長銅像除幕式は本月七日午前十時より岡山醫科大學學庭に於て極めて質素に執行せられたり其の概況は左の如し

當日は菅校長未亡人並に令息忠芳博士を始め參列者二百餘名にして定刻に至り第一號鐘にて一同菅校長銅像前に集り藤田委員長開會の挨拶ありて菅校長銅像は故菅校長令孫清子嬢により筒井校長銅像は岡山醫科大學生田坂三友君によりて除幕せられ第二號鐘にて式場に着席し藤田委員長の式

辭朗讀、中川委員の事業の報告あり、次に長岡山縣知事、大野第十七師團長、荒木京都大學總長、有森衆議院議員、窪谷岡山市長、坂田岡山縣醫師會會長、御牧都窪醫師會會長、奧島卒業生總代及び岡山醫科大學々生、生徒總代田坂三友君等の祝辭あり、次に田中委員は各地より寄せられたる祝電を朗讀し次で遺族總代として菅忠芳君の答辭ありて式を終り別室(講堂)に於て茶菓の饗應あり一同退散したるは正午頃なり當日朗讀されたる式辭、事業報告及び荒木總長の祝辭は左の如し

### 式辭

故菅筒井兩博士ノ銅像竣成ヲ告ゲ縉紳各位故舊門下諸氏ノ參列ヲ得テ本日除幕式ヲ舉行ス抑モ故兩君ノ共ニ三十有餘年ノ久シキニ互リ終始一貫孜々トシテ子弟ノ薰陶ト學界ノ指導ト將々救民濟生ノ業トニ盡瘁セラレタル功績ハ瞭々赫々既ニ世ニ定評アリ今復蕪辭ヲ加フルヲ要セズ就中兩君ノ相嗣テ岡山醫學專門學校長、岡山縣病院長トナリ共ニ銳意校運ノ發展ト病院ノ改善トニ努力シ途ニ今日ノ岡山醫科大學設立ノ基ヲ作ラレタルハ偉績中ノ偉ナルモノト云フベシ

今ヤ有志ノ贊同ニ依リ兩君ノ胸像竣レリ生彩奕々確ニ兩君當年ノ容貌ト意氣トヲ表示セリト信ス以テ長ヘニ不言ノ教訓ヲ垂ルベク生前ノ偉功モ亦此像ト共ニ萬古不朽ナルベシ

茲ニ除幕式ヲ舉グルニ當リ兩君ノ生前ヲ追想シ今昔ノ感轉々切ナルヲ覺ユ

一言以テ式辭トナス  
大正十二年十月七日

報告

故菅、筒井兩校長銅像建設委員長 藤田秀太郎

一、大正十年五月、六月ノ頃有志ノ間ニ故菅、筒井兩校長ノ銅像建設ノ議起ル  
一、同十年十二月八日岡山醫學專門學校教授諸氏ノ會合ヲ機トシ其方法ヲ  
協議ス

一、越エテ同月十日同校教授及岡山市在住卒業生有志諸氏ノ會合ヲ要メ岡  
山醫學專門學校ガ明春岡山醫科大學ニ昇格スルト共ニ之ガ基礎ト機運ト  
チ醸サレタル故兩校長ノ偉業ヲ永遠ニ記念スル爲メ兩氏ノ胸像ヲ建設セ  
ンコトヲ謀リ滿場一致ノ賛成ヲ得テ茲ニ岡山及ビ千葉ノ兩校卒業生間其  
他一般ニ廣ク寄附金ヲ募集スルコトヲ議決シ發起者トシテ池上馨一君外  
三百四十四名ヲ推薦スルコト、ス次ニ衆議藤田秀太郎ヲ委員長ニ推シ實  
行委員選定ヲ委任ス依テ委員長ハ石本於義太、岡西龜太郎、寛繁、田中  
文男、中川小四郎、藤原鐵太郎、荒木蒼太郎、赤澤乾一、坂田快太郎、  
齋藤精一郎ノ十名ヲ實行委員ニ指名シ快諾ヲ得タリ

一、委員長ハ趣意書ヲ印刷ニ附シ右關係諸氏ニ廣ク之ヲ配附シ締切期日ヲ  
大正十一年六月末日トシタルモ尙ホ寄附申込絶エザルヲ以テ更ニ二箇月  
間ヲ延期ス

一、寄附金總額ハ金七千貳百七拾圓五拾錢ニ達ス  
一、大正十一年九月五日實行委員會ヲ開催シ銅像製作ヲ在東京彫刻家武石  
弘三郎氏ニ臺座設計ヲ文部省技師柴垣鼎太郎氏ニ依託ノ件ヲ可決ス  
一、同十二年九月、十三箇月ヲ隔シテ兩銅像全ク竣成ス其間文部省技師島

海他郎、同技手菱木常吉ノ兩氏ハ臺座建設工事ヲ監督セラル  
一、銅像鑄造費金參千貳百圓、臺座建設工事費金貳千四百圓ヲ費ス  
大正十二年十月七日  
中川小四郎

故岡山醫學專門學校長菅筒井二君ノ銅像成リ茲ニ除幕ノ嚴儀ヲ舉ケラル、  
ハ鄙人ノ慶驪ニ勝ヘサル所ナリ  
憶フニ菅君ハ校運ヲ以テ生命ト爲シ苟モ校運ニ益アラハ如何ナル犠牲モ敢  
テ辭セス殊ニ尤モ心ヲ教官ノ選擇ニ用ヒ博搜精銓寤寐之ヲ求メ一旦之ヲ得  
レハ其學術識見自己ニ賢ルヲ喜ヒ復々出身性格ノ異同ヲ論セス故ニ碩學賢  
才皆其招ニ應シテ其能ヲ竭スチ樂ミ以テ常校人物ノ盛、中外ニ喧傳スルヲ  
致シ遂ニ能ク衆智ヲ集メテ大功ヲ收ムルヲ得タリ筒井君ハ衆人ノ才幹ヲ以  
テ菅君ニ代リ善ク其遺志ヲ繼キテ之ヲ遂行セラル爾來校運日ニ振ヒ人才年  
ニ興リ當大學今日ノ隆昌ヲ見ルニ至ルモ菅君創業ノ功、筒井君守成ノ績ト  
相待テ之カ根基ヲ爲セルニ由ラスムハアラス宜ナリ學ノ君子、及門ノ諸  
彦追慕措カス途ニ銅像鑄建ノ舉ニ出テラレシヤ  
夫レ前賢ヲ觀仰スルハ後進ノ教法ヲ啓ク所以ナリ自今兩像學庭ニ列峙シテ  
日夕觀仰ノ標榜ト爲ラハ精神氣魄相感召スル所或ハ賢能樂進ノ衷ヲ誘ヒ或  
ハ後學思齊ノ念ヲ動カシ用人育才興教進學ノ諸端ニ於テ必ス大ニ裨補スル  
所アラム誠ニ此ノ如クナレハ二君ノ不朽ハ當學ノ進展ト俱ニ窮マリナク兩  
像鑄建ノ美譽モ益々意義ノ深長ヲ覺フ鄙人實ニ厚望アリ敢テ蕪言ヲ陳ホ以  
テ祝辭ト爲ス

大正十二年十月七日  
京都帝國大學總長 荒木寅三郎